

今年も文教環境委員会に 市議会5月臨時会で役員改選

5月16、17日に市議会臨時会が開かれ、正副議長をはじめとする役員などの改選が行われました。

議長には後藤光雄議員（4期・鈴鹿の風）、副議長には宮木健議員（2期・平明の会）、監査委員には宮本正一議員（2期・緑風会）が選出されました。

私の今年の所属常任委員会は、文教環境委員会となりました。教育委員会・文化スポーツ部・環境部を所管する委員会です。

日本共産党市議団の各議員の役職は、次の通りです。

石田秀三	文教環境常任委員・議会運営委員
森川ヤスエ	地域福祉常任委員・鈴鹿亀山地区広域議会議員
橋詰圭一	産業建設常任委員会副委員長・国民健康保険 運営協議会委員

（予算決算常任委員会は、正副議長・監査委員以外の全議員が所属。）

議会三役は立候補制で投票で決め、委員会その他の役職は、各会派の代表による協議で決められます。ずっと以前は、水面下のポスト争いが続いて、長時間かかりましたが、今はさっさと決まります。今回も2時間ほどの協議でした。共産党市議団の所属も、要望どおりになりました。

今回も会派の移動が少しあり、2名いた「無所属」議員がなくなり、全議員が会派に入りました。会派の数は、7です。

また、自民系の会派「平明の会」が、議会終了後に名称変更をして、「自由民主党鈴鹿市議団」となりました。自民党をはっきり名乗った会派ができたのは、鈴鹿では初めてではないかと思えます。

6月議会から、本会議場の議席配置が変わります。共産党市議団の3人は、最後列から最前列に。末松市長の真正面に座ります。

憲法学者・小林節講演会に1100人

5月22日、鈴鹿市民会館ホールで「憲法学者・小林節さん講演会・どうする、平和・暮らし・ボクらの未来」が行われ、市内外から1,100人を超える参加者で盛り上がりました。1月から市民の実行委員会での取り組みがスタート、「安保法制廃止、立憲主義回復、野党共闘」を訴える小林先生の話が鈴鹿市民に聞いてもらおうと、いろんな人が実行委員会に集まりました。（鈴鹿市議も8人が参加）



当日の私の仕事は「駐車場係」、開演の1時間前ぐらいから、どんどん車がやってきて、案内が追いつかなくなり大変でしたが、皆さんの協力で何とか役目を果たせました。あとから会場に入ると、けっこう満員に近く熱気にあふれていました。この市民の力が、アベ政治をストップさせる流れを大きな本流に発展していくことを願います。

選挙区は芝さん、比例区は「共産党」

小林講演会の翌日23日、三重県でもようやく野党の統一がまとまったという、うれしいニュースが流れました。市民団体「市民連合みえ」が、民進党・共産党・社民党とそれぞれ政策協定を結ぶという形で、現職の芝博一氏を擁立し、勝利をめざします。

政策協定は、安全保障関連法を廃止する、立憲主義を回復し、個人の尊厳を擁護する政治を実現する、安倍政権による憲法改悪を阻止する、アベノミクスによる生活破壊を許さず、格差を是正し、公正な社会をつくる、の4点を掲げています。

この統一候補決定を受けて、これまで予定候補として活動していた釜井敏行さんは選挙区から比例区にまわり、ひきつづき活動することになりました。私たち共産党としては、初めて他党の候補者の応援をすることになります。そして同時に、「比例区は共産党を」との運動を強めて得票アップをしなければなりません。選挙区での芝さんの当選と、比例区での共産党の議席増めざして、がんばりましょう。

人権啓発の大看板が、変わりました

市役所の立体駐車場から庁舎入り口までの通路と県道のあいだに、三面の



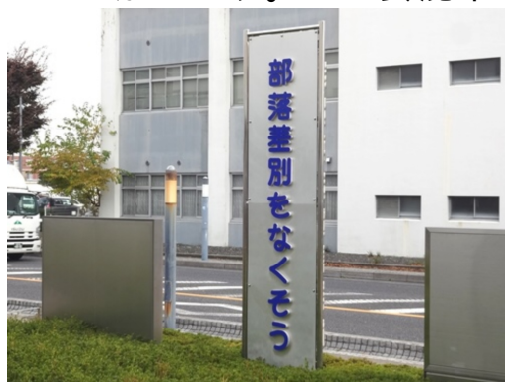
新しく付け替えられた看板

看板が立っています。「非核平和宣言都市」と「交通安全」、そして通路から見える面には「部落差別をなくそう」と書かれていました。

私はこの看板は、撤去するか書き変えることを、議会質問などで何度も求めてきました。鈴鹿市の人権行政の成果や到達点に合わない、時代遅れのスローガンだからです。いま鈴鹿市で

「同和」関係で問題になるようなことは、何もありません。すでに関係法令も失効し、「部落」などという言葉も、死語になっています。

先日から、看板の文字が「人権尊重のまち」と改められました。担当課に聞くと、「かねてからご指摘をいただいていたのを、見直して変えました。」とのこと。



先日まで約30年立っていた看板

おおいに結構なことです。そして、一部運動団体が行政に押し付けてきた「根深い差別意識は、いつまでたっても無くならない」という誤った認識をただし、同和問題の終結を公式に宣言することを求めていきたいと思います。

市営斎苑、今年度に整備計画策定

市民の皆さんが、人生の最後に利用する公共施設が、市営斎苑（火葬場）です。今の施設が出来たのが1985年、もう30年余となり老朽化が進んでいます。火葬炉は10年ほどで計画的に更新をしていますが、今後の見通しでは、高齢化などにより今の6基では不足となり、8基に増やす必要があるとのこと。また、人だけでなく「ペット」についても、対応できる施設にすることが求められています。

市は今年度に、この斎苑を建て直すのか、「長寿命化」工事でいくのか、など検討して方向を決める「基本構想」を策定します。

ずいそう



宿場町を守った商人たち

いま上映中の映画「殿、利息でござる！」は、江戸時代の中頃、仙台に近い吉岡という宿場町で実際にあった話を小説にした、磯田道史「穀田屋十三郎」（「無私の日本人」所収）が原作である。

昔、吉岡宿は貧しい町で、藩の助けもなく民家がつぶれ始めた。このままでは町が滅ぶと、危機感を持った穀田屋十三郎たち9人の商人が知恵をしばって、ある奇策を立てた。それは、千両の「基金」をこしらえて、その金を仙台藩に貸し付けて、その利息（10%）毎年100両を全住民に配るというものであった。この策を立案した明和3年（1766）から、金集め、藩との困難な交渉の末に実現した安永3年（1774）まで足かけ8年、9人は自分たちの身を削りながら奔走した。

吉岡宿では安永3年から、毎年暮れに利子100両が住民に配られるようになり、そのおかげで吉岡の町は潤い、幕末に至るまで人口も減ることなく、繁栄したということである。

強欲資本主義・日本への、江戸時代からの警鐘

原作を読み、映画を観て「本当にこんな人たちが、250年前の日本にいたのか？」というのが、率直な感想であった。しかし、この物語はフィクションではなく「実話」であり、「国恩記覚」などの記録に基づいたものである。当時の1000両は、今の3億円に相当するという。そんな大金を人のため、皆のために惜しげもなく差し出し、見返りを求めない商人たち。支配者である武士の中にも、彼らに共感し首をかけて動く役人もいた。江戸時代は窮屈な身分社会で、武士が威張って百姓を搾取する、というだけの固定観念を改めなければと思った。

一方、現代のわが資本主義・日本はどうか？若者を非正規でこき使って儲け、一生かかっても使いきれないカネを、海外のタックスヘイブンに隠して財テクに励む大金持ち。データ改ざんまでして競争に勝とうとする大企業。史上最高の利益を上げていても、税金を払わない仕組みを考えた財界と政治家・官僚。そして、公私混同、公金浪費を追及されて逃げ回る某都知事、などなど。「矜持」という言葉など、彼らの頭の中には全く無いのだろう。